

21世紀は
「ごちゃまぜ」の時代(4)

-地域包括ケアとごちゃまぜ③

-シェア金沢に行こう-

text by Takeshi Karasawa

文 唐澤 剛

金沢市の郊外に「シェア金沢」がある。地方創生を進める政府のまち・ひと・しごと創生本部が推奨する「日本版CCRC (Continuing Care Retirement Community) 生涯活躍のまちづくり」構想のモデル地区だ。

2014年にオープンしたシェア金沢には、図の通り、総面積約1万1千坪の敷地に、介護福祉とコミュニティビジネスを連携させ、天然温泉、レストラン、売店、カフェ

バー、キッチンスタジオ、全天候型グラウンドなど「地域コミュニティ」と「働く場」があり、高齢者デイサービス、訪問介護ステーション、障がい者グループホーム、障がい児施設、サービスクラス、多様な人たちが共生できる居住環境が整備されている。

高齢者住宅の入居者が売店で働いたり(年金以外の収入を得られる)、学生がボランティア活動を行っている(家賃が軽減される)。小学校の子どもたちが学校の帰りにやって来る。なぜかアルパカ牧場まである。

シェア金沢の開設運営者は、社会福祉法人「佛子園」であり、理事長は雄谷良成氏だ。雄谷氏は、社会福祉法人佛子園の理事長であり、「公益社団法人青年海外協力協会」理事長、「日蓮宗普香山蓮昌寺」の住職という

3つの仕事をしている。公益社団法人青年海外協力協会は、青年海外協力隊のOB・OGの団体であり、雄谷氏も青年海外協力隊員としてドミニカ共和国へ派遣されていた。

シェア金沢のコンセプトは、「ごちゃまぜ」と「開放」だ。「ごちゃまぜ」はあらゆる人を包み込み、「開放」は誰も排除しない。全く塀のない広い敷地は、誰が来てもよい場所であり、誰も排除されない場所である。

私は、これを住民による住民のための「地域密着型生活テーマパーク」と考えている。テーマパークというのは、普通は遠くから人を集めるところだが、このシェア金沢は近くの人たちが集まる場所なのだ。

天然温泉と居酒屋がある建物は、冷暖房も効いていて、居るだけなら何時間居ても無料なので、近所の人々が来てテレビを見たり、話をしたり、

子どもたちが楽器の練習をしたりしている。朝採れたての野菜(シェア金沢の売店で売っている)を持って来た農家の人が、その後に温泉でさっぱりして帰る。シェア金沢の天然温

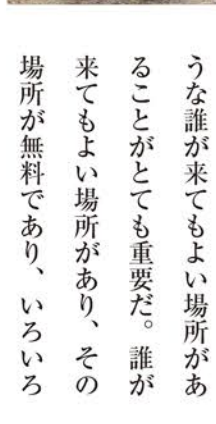
泉の入浴料は400円。町内の人は無料だ。プータンそばも売っている。アルパカを見て、温泉に入って、居酒屋で一杯やるのは至福である。私はもうシェア金沢に5回以上行った。

「ごちゃまぜ」には、このような誰が来てもよい場所があることがとても重要だ。誰が来てもよい場所があり、その場所が無料であり、いろいろな人たちが集まる。高齢者や障がいのある人もない人も集まる。お母さんと小さな子どもたちが集まる。小中高生が集まる。このような場所があることが、「ごちゃまぜ」の地域包括ケアづくりには、とても重要だ。何度も書いたが、乳幼児とお母さん、小中高生が集まることは、特に重要だと思う。実際、シェア金沢あ

る地区は、それまでは人口が

減少していたが、シェア金沢開設以来、人口が増加している。特に、若い子育て世代が増加しているようだ。雄谷氏は、2018年度からは能登輪島で、古民家のリノベーションを中心としたまちづくり「輪島KABULET(カブレット)」を始めた。サービスクラス高齢者住宅、グループホーム、カフェ、ゲストハウス、地域密着型ウエルネス(健康づくり)があり、温泉も居酒屋も蕎麦屋もある。先行して取り組んできた小松市の「三草二木西園寺(2008)」、白山市の「B's行善寺(2015)」にも温泉がある。日本海倶楽部というビール醸造所もある。皆さんもぜひシェア金沢に出かけていただきたい。

Share金沢 概要[総面積/約11,000坪]



バス待合室/子どもたちの遊学バス、買物バス/ターミナルなど住人みんなが利用します。



Profile

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授。
1956年長野県安曇野市生。1980年早稲田大学政治経済学部卒業。同年厚生省に入省。2014年厚生労働省保険局長、2016年6月内閣官房まちひとしごと創生本部地方創生総括官。同年8月に退職、12月から現職。